

## 72 《聖マタイの召命》・真実のストーリー・その3

### 見る位置で決まる絵画内容

2024

真鍋友範

#### 1 比較すると判明する事実

現在の《聖マタイの召命》展示は、ある事実を鮮明に語っている。



現地聖堂で見る《聖マタイの召命》（画面左）と、正面から見る《聖マタイの召命》

\*イエスの二つの重要な動作がまったく見えないことが分かる。

この斜め下からの現地鑑賞と、正面からの図版による鑑賞を比較しよう。

現地状況は、見る側にどのような印象を植え付けるのかをまず、検証する。

現地で見える実物は、異様な鑑賞位置である。真正面から作品が見られないのだ。

理由は明らかだ。個人礼拝堂の壁に掲示されたことにより、鑑賞スペースが狭く、多くの鑑賞者が礼拝堂前のスペースに入らないよう規制する柵が設けられている。【鑑賞者は左斜め下から見上げるという奇妙な鑑賞スタイルを強いられるのだ。】まあ、これは仕方ないのかもしれない。当時なら、他人の敷地にな  
いような意味の柵であり、正面から見せろと文句も言えなかったのだろう。

しかし、この状態を400年放置したら、とんでもない事実誤認が生じることになった。

最初の誤認識として、【イエスは指差し動作であるという誤認識だった。】

なぜなら、イエスの開かれた左の手の平や、イエスが左に一步踏み出した右足が闇に消え、見えないのだ。(上記図版右側の丸囲い部分)

【このことで、イエスは単純な指差し動作であると、誤認識する。】

恐ろしいことは、最初に誤認識した17世紀イタリアの美術史家ベッローリの判断を、400年間信じてきた後世の美術史家や宗教関係者、また近年では、ローマ市公認の公式ガイドの説明でも、この誤りが正解としてまかり通っていることにある。

さて、真実はどうかというと、イエスの身体動作は複雑だ。上記右側の図版をよく見て頂こう。

【イエスの動作は、瞬間的に発生した動作ではない。順を追って発生している動作だ。】

したがって、一つ一つの意味を検証する必要があるのだ。

しかし、400年間に渡り、この検証がなされなかったことで、事実は消されてしまったのだ。

しかも、問題はそれだけではない。【イエスの右手は、指差す手であると、誤認識されたことだ。】

よく見て欲しいが、遠くからは様子がはっきり見えないのだ。全体的な印象は確かに指差しているかのようなのであるが、【手首は曲がり、指先も曲がっている。】

【この状態を真似ればわかることだが、イエスの右手は指差す手ではない。】

下方を指差す手であるとは、絶対に判定できない。指先にも力が込められてない手の状態だからだ。

さて、誤判定はこれだけではない。

イエスが指差していると、判定することで、次は髭男が質問しているように感

じるのだが、この時も見落としが生じる

ストーリー上、髭男が、『私ですか』と質問していると誤解する。この時、指先の方向は、移動途中である動作の指先であり、髭男自身に向いていると誤解する。

この時、重要な描画内容を見逃す。

それは、【髭男の立てられている親指の状態だ。】

考えてみれば明快だ。人を指差す時、無意識に親指を立てる人はいない。また、子供時代の習慣が残り、ピストルマークで指差す人なども、存在しないのが普通だ。

【先入観が加わると、実は意味のある親指の意味が、全く目に入らないのだ。】

まだ他にもある。

【近くに描かれた人物の意味を、必要異常に過大に読み取るのだ。】

マタイの仲間である、座った姿の計算係の若い収税人に対し、重要な意味があると勘違いするのだ。

カラヴァッジョの絵画を研究しているなら、誰もが気づいていることだが、カラヴァッジョは、主役級の人物を必ずしも目立つように描かない傾向を持つ画家なのだ。《聖マタイの殉教》では、下の方に倒れて居て、殺人者より目立たないし、《エジプト逃避中の休息》では、主役を差し置いて、中央に脇役の天使がいる。

ただでさえ間違いやすいのに、間近に拡大された人物があれば、通常の人とは先入観で重要な描画対象と誤解する。

この若い収税士を真正面から見ると、単に片隅の登場人物の一人でしかない。

よく見えない実際の暗い聖堂内の展示では、読み取れる内容は、以下になる。

【イエスは召命相手を指差したが、よくわからない動作であったので、髭の男は問い返した。】これは明らかに間違いだ。

髭の男が聖マタイだというイタリア人の誤認識は、このような背景と、イタリアの17世紀の芸術家ではない美術史家ベッローリの誤判断で定着してしまった。

その後の、1980年代のドイツのアマチュア美術史研究者たちの議論から、若い座った収税人という結論となった。特に帽子を被っている人物は、外から来た納税人物であり、収税人のマタイではないという判断は、良い判断だった。結果として【収税人は二人いるのに、若い収税人にスポットが当てられたのは、彼が座った人物であり、マタイ伝に描かれた人物にピッタリ当てはまると、誤判断された】のだろう。

なぜ、誤判断であったか。それはカラヴァッジョが構築したストーリーが読めていなかったからだろう。

【最初は座っていたマタイも、収税作業の時間的進展とともに、その姿勢を机に寄りかかった姿勢へ変えたこと】など、読み取れて居なかったのだろう。

ドイツ学派美術史家は、【座った人物であるから、マタイ】と考えたことが間違いであったのだ。

## 2 結論

正面から見ることによって、全てを見ると、容易に全貌が正確に読める。

収税所の窓を通してマタイを見たイエス一行は、玄関側に回り、収税所のドアを開けた。

突然のイエス一行の入室と視線を感じた納税者の一人である髭の男は、イエスに向かって二段階の身体動作で質問した。

『お探しの人は、私ですか、それとも隣のメガネの収税人ですか』

【親指をヒゲ男自身の胸に向け、続けて人差し指を隣のメガネの男に向けた】

質問を受けたイエスは、左手を開いてヒゲの男に掌を見せ、質問を受容する意思を伝えた。

次に、イエスは一步左側に右足を踏み出して、自身の視点を横に50センチほど移動させ、呼び出し対象者（マタイ）の顔が見える位置に移動した。

そうして、三段階目の身体動作として、イエスは、右腕を廻して向こう側の人物を呼んだ。

（収税所の西側の高窓からは、この時父なる神からの一条の光が、マタイの頭頂部を点光となり、イエスを導いていた。）

イエスは言った。『私に従いなさい』

この言葉を聞いたマタイは、即座にイエスの手の仕草と視線から、自分が呼ばれた相手と理解し、机に手を置いた姿勢から、【上体を起こして立ち上がり】、疑いなく静かにイエス一行に従った。

イエスは、弟子ペテロの体に大部分が隠れ、また呼ばれたマタイも、若い収税人の姿の後ろ側に隠れている。

対称的、対局的な位置に両者は配置されていることは、残念ながら、正面から眺めないと認識されないのだ。



長くなったが、とにかく、【現在の展示は、カラヴァッジョの描いた真実の内容が、正確に読み取れない展示であり、これ改善しない限り、真実はこれからも永遠に事実が隠蔽されたまま、ローマ・カトリック教会は誤情報を世界に拡散するだろう。】